

コラム 緑化植物 ど・こ・ま・で・き・わ・め・る

タケニグサ (*Macleaya cordata* (Willd.) R.Br.)

内村慶彦 (鹿児島県森林技術総合センター)
tashiro@kpftc-pref.kagoshima.jp



ニホンジカが多い地域で、シカ食害から逃れ青々とした大きな葉をつけた草丈1~2mほどの草本をみかけたら、恐らくそれはタケニグサだろう。本種はケシ科の有毒植物で、ニホンジカは経験的にそのことをよく知っていると考えられる。有毒植物と聞くとあまり良い印象を持たれないかもしれない。しかしながら、欧米では観賞用として庭園に栽培されている⁴⁾、シカが多い地域ではシカ食害に強い特性を活かして法面緑化への利用が試みられている^{2,6)}。

本種は本州、四国、九州地方の日当たりのよい荒地に生える夏緑性多年生草本で成長期間は3~9月、花期は6~8月で白い小花を多数つける¹⁾。茎や葉を切ると黄色い汁が出るが、アルカロイドを含み有毒⁴⁾で、食べると嘔吐、昏睡、体温降下などを起こす¹⁾といわれている。さく果は長さ2~3cmで扁平、広倒被針形³⁾で中に細かい種子を含む。種子は2mm程度でドングリ状の形態を有している¹⁾。鹿児島県では種子は9月から11月中旬くらいにかけて採取することができる。筆者は採取後、2週間程度乾燥させて、さやごと種子をビニール袋に入れてもみ、ふるいにかけて種子を選別している⁷⁾。なお、名前の由来については諸説あるが^{4,5)}、一説には茎が中空でタケに似るから⁴⁾、といわれている。

冒頭でも述べたが、本種はシカが多い地域での緑化植物として注目されており、筆者も本種を用いた林道法面の吹付緑化試験を実施している⁶⁾。本種を用いた植生基材吹付工を1月に実施したところ、同年4月には発芽がみられ、6月の梅雨時期には全面を覆っていた⁶⁾。また、冬季は地上部が枯れ

るため被覆率は急激に低下するが、翌春には新葉の展開により被覆率が回復し、降水量の多い梅雨時期における土砂流出抑制効果を確認できた⁶⁾。当初は本種のあまりの占有率の高さに自然侵入種が抑制されるのではと懸念していたが、2年2ヶ月後には隣接する無種子区や外来牧草主体区と比較して木本植物(アカメガシワやシイ類等)を含む多くの種の侵入を確認できた⁶⁾。この要因として、他の処理区と比較して土砂流出が抑制されていたため種子が定着しやすかったことに加え、冬季に枯損した地上部が法面に倒伏することで、飛来種子を捕捉する効果が発揮されたのではないだろうかと筆者は推察している。

本種を用いた法面緑化の実用化のためには、その発芽特性を解明し、それに基づいた適切な種子保存方法を検討する必要がある。鹿児島県内で採取された種子を用いた実験では、本種の種子は散布された段階では休眠状態にあり、休眠解除には冷湿処理が必要であること、高温条件にさらすことで、二次休眠が誘導される可能性が高いことが示唆されている⁷⁾。これらの性質から、本種の種子は秋季に散布された後、冬季に休眠解除され、春季に発芽していると考えられる⁷⁾。しかしながら、一部の種で確認されている発芽特性の種内変異がタケニグサにも存在する可能性が指摘されており、今後の検証が必要である⁷⁾。

引用文献

- 1) 浅野貞夫 (1995) 原色図鑑 芽ばえとたね 植物3態/芽ばえ・種子・成植物, 全国農村教育協会, 279 pp.
- 2) 石坂知行・山瀬敬太郎・下田康博・宗接聖史 (2009) ニホンジカ不嗜好性植物を用いた緑化工法, 林道, 46: 120-123.
- 3) 北村四郎・村田源 (2008) 原色日本植物図鑑 草本編II, 保育社, 390 pp.
- 4) 木村陽二郎監修・植物文化研究会編 (2005) 図説 花と樹の辞典, 柏書房, 589 pp.
- 5) 長田武正・長田喜美子 (1985) 検索入門野草図鑑⑦ さくらそうの巻, 保育社, 205 pp.
- 6) 田代慶彦・下園寿秋・中村克之 (2013) シカ不嗜好性植物を利用した林道切土法面の吹付緑化, 日本緑化工学会誌, 39(2): 256-259.
- 7) 田代慶彦 (2014) シカ不嗜好性植物タケニグサの種子発芽特性に関する研究, 九州森林研究, 67: 62-64.

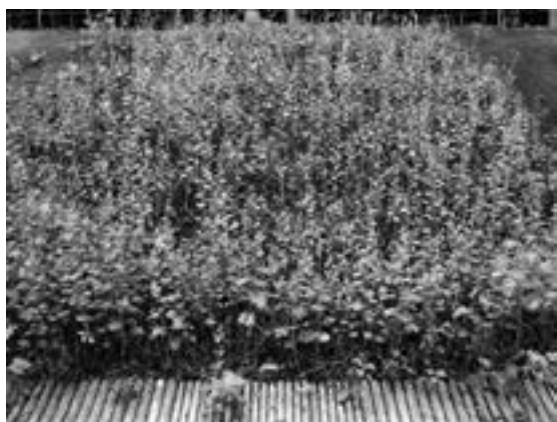


写真-1 タケニグサで緑化した法面

